

アナキズム／文学と思想

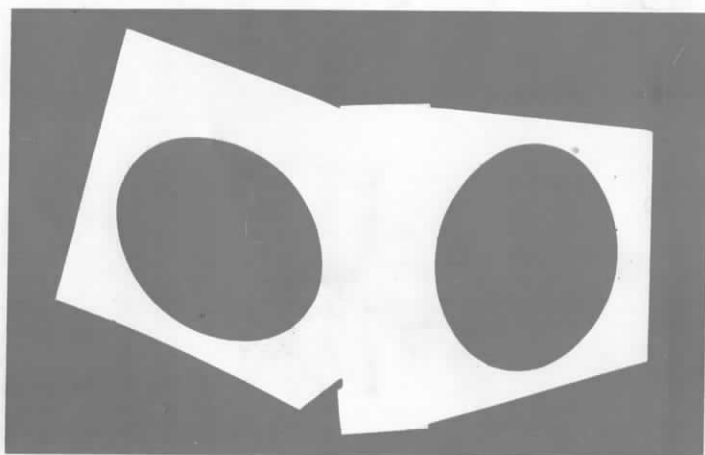
イ オ ム

労働と職業（労働に関する断章 4） 日野善太郎 1

アイルランド問題の理解のために（上）
ワット・タイラー／草浦公英訳 13

シシリー島での優雅なるバカンス 平山房子 26
（ヨーロッパの旅・第6回）

<日本無政府共産党>への批判 宮崎 晃 49



詩 山口 英／高島 洋 20

イオム雑記 寺島珠雄／杉藤二郎／河本乾次 39

1975-5

N-ro8

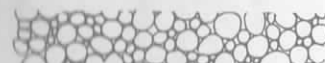
黒色戦線社
〒372 群馬県伊勢崎市巾町和田 振替 宇都宮 11015

大杉栄発行無政府主義新聞 労働運動 復刻 価 5000円
純正無政府主義 農村社会革命講座 八太府三著 価 150円
階級闘争説の誤謬 八太府三著 価 130円
無政府共産主義-人類解放の道-八太府三著 価 700円
無政府主義組織論 マラテスタ著 価 100円
選挙戦に際して一付路伝一 マラテスタ著 価 150円
農民の中へ マラテスタ著 価 200円
マフノの農民運動 石川三四郎著 価 150円
ベルテロー新山脈 泰治訳 価 150円
平民の鐘-無政府の福音- 価 150円
無政府主義者は答える 岩佐作太郎著 価 150円
日本無政府主義運動史 第一編 価 350円
反逆者の牢獄手記 大杉・朴烈ら十二氏著 価 200円
獄窓から一増補決定版一 和田久太郎著 価 800円
死刑囚の思い出一増補決定版 吉田大次郎著 価 700円
――二増補決定版事件訴訟記録―― 価 300円
天皇制破壊への渦動 価 300円
鎌倉雄高氏の天皇批判の証言収載
神話労働運動（大正13年3月号発刊を復刻）
大杉栄・伊藤野枝追悼号 価 400円
漫文・漫画 大杉栄・望月桂共著 価 500円
自治民範（全） 権成成卿著作集 第一巻 価 3000円
正義と道徳 クロボトキン著 藤生義訳 価 250円
難波大助大逆事件 虎ノ門で天皇を狙撃 価 900円
非証法的唯物史観の批評 石川三四郎著 価 150円
無政府主義とサンジカリズム 石川三四郎著 価 150円
道化と革命 補正版 付石川書 価 150円
ルクリュ著 石川三四郎訳
何が私をこうさせたか 金子ふみ子執中手記 価 2000円
権成成卿著作集2 農村自教論・日本農村史 価 3000円
大杉栄秘録 堀保子ほか19氏 価 500円
無政府主義論 エンリコ・マラテスタ 価 300円
ディナミック 石川三四郎個人紙復刻版
アナキスト革命 ジョージバレット訳 価 3000円
雑誌「労働運動」 大杉栄主幹（近刊）
雑誌「黒色戦線」 （近刊） 価 150円

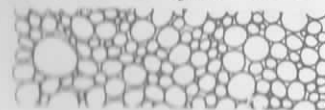
黒色戦線社 出版案内

（送料本社もち）

アナキズム紙誌復刻……
思想文芸誌復刻……



ことばの羽ばたきをもとめて……



タイプ・タイプオフ印刷

摩耶プリント

新住所 神戸市葺合区上筒井通6丁目2-13

新電話番号 (078) 242-4573

イオム 第8号（季刊） 発行日 1975年5月1日／発行所・イオムの会・神戸市

葺合区熊内町1丁目5-3／発行者・イオム編集委員会

¥250

労働と職業 (続)

日 野 善 太 郎

(一)

プロ野球選手も、小説家も、会社経営も夫々みな職業である。前回はそれらの職業について考えてみた。それらの職業は、身すぎ世すぎにせよ、ひたすら金儲けにせよ、労働ではない職業である。

労働ではない職業——言いかえれば労働しない職業は、他にも沢山ある。教師、銀行員、美容師、医師、接客婦等々である。

そこで職業を三つの種類に大別してみる。

第一は労働そのものである職業である。これまでもしばしば言ってきたように、衣食住を直接生産することであり、人間の生存に絶対欠かすことの出来ないものである。

第二に、労働はしないが労働を援けて間接に生産に寄与する仕事である。技術を開発する研究にたがう者、様々な事務を行なうもの、教育の仕事、健康を守る仕事等々がこれである。

家事労働と言われている仕事は、原義的には労働と言えないし、職業とさえ言えない場合も多いが、第二のジャンルに属すると考えるべきであろう。

輸送の仕事を第一のジャンルとすべきか、第二のジャンルとすべきかは、一寸決定し難い。輸送がつねに衣食住に直接関係しているとは限らないからだ。

第三の職業は、前記の二つに属さぬものをいう。人間の動物的生存には直接にも間接にも関係がなく、そんな職業がこの世になくとも人間は生きていられるだろうよ

うなものがこれである。多くは娯楽、芸術に関するものである。

ごく大雑把な分類である。この世の中の数知れぬ多くの職業を一つ一つ検討すれば、この三つのどれに入れるべきか迷うものも少くはないだろう。

たとえば警察官という職業は、第二とすべきか第三とすべきか、問題である。それが人間の財産、生命を守る仕事だと考えれば、当然第二のジャンルとすべきである。労働者の人間的な要求を弾圧するのが仕事だと考えるならば、第三のジャンルにさえ入れることの出来ないこの世の無用物である。

だが、この分類は、職業という概念をはなれた人間全体の仕事と考えても、なお有効な分類だと思う。原始時代のように人間が一人で何でもしなければならなかった頃とくらべて、現代では夫々に仕事を分担せねばならなくなっている。一人の人間が、医師であり、教師であり、画家であり、労働者でもあるということ、絶対不可能ではないが、才能などに応じて専門に一つを分担した方が効果的である。そういう風に考えてもこの分類は生きている。

ところで私は、職業が身すぎ世すぎであると言い、時としてそれは、ひたすらなる金儲けになるとも書いた。

それは、労働でない職業にのみ言えることであろうか。そうではない。労働である職業もまた然りなのだ。先の分類でいえば、第一のそれも同じ事なのだ。

何故そうなるのか。それは職業が、労働または才能及び物を売ることだからである。売買の観念を抜きにして職業は成立しない。売買の虚構性が職業の属性を規定している。と唐突に言っては少し判りにくくなるが、それを以下に説明しよう。

貨幣は、物の価値の計量的記号化にすぎないし、権力的強制がなければ流通しない。貨幣で物を売買することは、共同の虚構を容認するという前提がなければ成立しない。

物の価値は夫々別々のコンテキストを持っていて、同一の尺度で語ることとは出来ない。ダイヤモンドと卵と書籍の価値は夫々別の性質のものであり、それを見る者、利用する者の主観によっても価値は変動する。

貨幣はそれらの様々な価値を一つの尺度で比較する一応の便宜さを持っているが、そのこと自体がどだい無理な話なのである。第一貨幣に付与された価値は、虚構でしかないから、その虚構を認めなければ何の役にも立たない。

一万円というのは或る価値を数で示した虚構であり、

一万円札はその虚構の記号の実現形態でしかない。若しそれを聖徳太子の肖像の印刷された紙片、というようにだけ見るならば、その価値はそれだけのものではなくなる。

それを使用されている紙や、インク代や、印刷の間などで計算すれば、一万円札は百円の価値もないかもしれない。一万円札が一万円の価値を認められるのは、それを価値そのものとして認めるからでなく、その虚構が受け容れられているからである。

売買は虚構である貨幣を媒体として行なわれる。比較し得ない物の価値を比較しうるものとして、その目安に貨幣が使われる。売買とは、代償としての貨幣を授受することによって所有権を一方から他方へ移動させることである。そのこと自体の中に、売買の虚構性が含まれている。

もともとそれ自身は価値を持たず、虚構としての価値を付与されているにすぎない貨幣は、その虚構としての価値を人為的に変動出来るものである。

更に売買とは、売る側からは少しでも高く売ろうとし、買う側からは少しでも安く買おうとする性格を持った行為である。そこではしばしば対象となっている商品の価値とは無関係な策略が弄される。その策略が売買の虚構性の一つでもある。

一方で安く買った物を他方で高く売り、その差額を儲けとするのも、売買という行為の虚構性の一つである。

何物も生産せず、たゞ物を移動させるだけで、時には移動さへ自分では行なわずに利益を得たり、或品物を買って占めて隠し、供給不足の為に値上りするのを待って売り、莫大な儲けを手に入れる。そういう例を我々はしばしば見て来た。

物に働きかけ、採取したり、加工したりして新しい価値を作り出すことなく、人為的に相対的虚構の価値を付与しているにすぎないのである。それが売買である。

しかも、人間には絶対に所有を移動出来ないものがある。人間の自由は売ったり買ったりは出来ないものだ。自由は一人一人の「私」のものであって、他人に渡す事は出来ない。にもかかわらず、現実にはそれが売買されている。労働や能力が売られている。正確に言えば、人間の自由の売買という虚構が行なわれている。

私たちはここで再び、労働と職業ということにもどらねばならない。

労働者の職業は、一定の代償を受け取ることで「私」の労働を、一定時間だけ売ることである。だが、誰にとっても労働は「私」のものであって他人の肉体によって出来ることではない。それを売買するとは、ただ売買と

いう虚構に身をゆだねているにすぎない。つまり、実際にはあり得ないことを、あり得ることとして、仮定の中で行為しているのである。労働者ばかりでなく、他の多くの職業もたいていは同じである。

「私」の労働が「私」のものであるかぎり、「私」は好きなきに好きにように労働し、作りたいものを作り、自分の意志と欲望にしたがうであろう。「私」の肉体を酷使しようと、休養させようとすべては「私」次第の筈である。

だが、一たんそれを他へ売り渡したとなると、そうはいかない。「私」は自分を押えて他の指示にしたがわねばならぬ。労働を売るとはそういう事なのだ。一定の時間の間、買手の指示にしたがって労働する、という約束の履行が職業としての労働なのだ。

労働者が職場での仕事に、愛着をもてなかったり、意欲をなくしたりするのは、他人の仕事に労働しているからである。たとえば労働の成果はそっくり他人のものであり、自分の手に残るのは賃金という名の、労働の代金ではない。また、仕事について意見を述べることは出来ても、決定権はつねに買手の側にあるから、自分がどんなに正しいと思った考えでも、最後には引込めて買手の考えにしたがわざるを得ない場合があり勝ちだからだ。

たとえばそれが、毒ガスや原爆を作る仕事だとしても、職業としての労働が、そういう約束の履行である以上、拒む事は出来ない。それが厭なら早々に退職してその工場を去るしかない。有害食品を作っている工場、スモッグ公害の発生源になっている工場、みな同じである。

しかし、労働者が工場を去ること、すなわち職を棄てることは、収入をうしなうことであるから、そんなことは容易に出来ることではない。まして、一人や二人の労働者が工場を去っても、工場の経営者が方針を改めず、なおその工場に労働を売る人が跡を絶たぬかぎり、毒ガスも、原爆も、有害食品も、光化学スモッグも、この世から無くなりはないで、次々と作り出され続けるだろう。

本来、「私有」に属する労働を売買するという虚構にどっぷり身をゆだねると、買手は売手の労働だけでなく、肉体や意識まで自由に出来る、という錯覚に落ちてしまう。逆に買手の方では、肉体と意識まで完全に買い取られてしまったのだ、という錯覚に縛られてしまう。

(二)

だが、それは虚構であり、錯覚なのだ。虚構の中で、いくら他人の仕事に労働しているつもり

になっても、労働している肉体と意識は「私」のものである。だから労働の中で「私」がしばしば顔を出してしまいうのも自然なことなのだ。

私たちは腕自慢の労働者、腕自慢の職業人を、私たちの身辺によく見かける事がある。そういう労働者は腕自慢であるばかりか、彼の職業そのものに誇りを持っていたりする。

むろん、それは彼の労働がたとえ職業の虚構の中であっても、彼自身の肉体と意識によって行なわれているからだ。

仮に一人の建築労働者を想定してみよう。

彼は熟練した大工であって、或る木造建築の設計の段階から関係し、材料の選び方から使い方で思うままな仕事が出来たとする。言うまでもなく、建築は一人の大工だけで出来ることでなく、葺、土工、左官、電工、屋根屋、配管工、畳屋、表具師、その他の協力がなければならぬが、にもかゝらず、彼は彼の関与した部分について、彼の労働を誇りに思い、出来上った建築を彼自身にとっての快心の傑作だと思ふ。仕事中、彼は彼の仕事について彼の意見を通し、彼の施主や施工者とも争ってゆずらず彼の主張を通し、日々進行する工程の中で自身の腕の牙えをたしかめ、これは俺の仕事だ、これは俺

の作品だと思ふ。そう思って当然なのだ。

だが、その家が完成したとき、最も多く利益を得るのは、彼の労働の買手である施工者であり、彼の作品の所有は、その家の買手である施主に帰する。しかも、このことは着工以前に判っていたことであり、大工もそれを知っている。それでいながら、彼はこの家を俺の作品だと思ふ。そして、それが彼の作品である事は、施主も施工者も疑わないかもしれない。ここに矛盾がある。

煩雑をさける為、多くの例を使いたくないが、もう一つの例をあげよう。

同じ現場に一人の土工が働いたとしよう。

彼の仕事は大工ほど目立ちもせず、彼の技術を大工のそれとくらべれば粗雑に見えるかもしれない。だが基礎工事の段階では彼が主役である。掘ったり、埋めたり、コンクリートを打設したり、炎天下、裸になった上半身に滝のような汗を流しながらそれをしたか、それとも、耳が千切れるような寒風にさらされて、こゝろ指で手ばなをかみながらそれをしたか、いずれにせよ、買われた労働を彼は行為したのである。

彼も大工と同じく、一日幾らの賃金で買われたか、工事の或部分を下請けたかのどちらかであろう。買われた労働なのである。彼の基礎工事の上に建てられる家が

彼のものでないことは始めから判っている。

しかし、彼の肉体にきざまれた労苦は彼のものののだ。陽に灼けた肌、酷使に耐えて痛む筋肉、それらは誰のものでもない彼自身のものなのだ。そして、彼の労働がなければ、基礎工事は出来なかったのだ。

ここに職業と労働の矛盾があり、職業の虚構性がある。大工と土工に限らず、他の職業についても同じ事が当然言えるだろう。建築以外のことにひろげて変らないだろう。また、職業と労働と言わずに、職業と才能と言っても同じだろう。

あくまで労働は「私」のものというのが真実であり、労働を売ったり買ったり出来るというのが虚構である。にもかゝらず、虚構の方が事実としてまかり通っている。

そういう現象は、職業だけとは限らない。たとえば、国家も一つの大きな虚構である。貨幣価値も虚構である。結婚も虚構である。法律も、道徳も虚構である。別の言葉で言えば意識内存在である。それらは人の意識の中でだけ存在する。人がその存在を意識した時だけ存在する。たとえばそれらは、コップのように存在しない。コップは「私」が目を閉じれば「私」の視界から消えるし、「私」はコップの存在を意識しないことも出来る。しか

しコップは「私」の意識の外で確実に存在している。

職業や、国家や、貨幣価値や、法律や、結婚やその他は、「私」の意識が存在を否定すれば実在性をうしなう。「私」がいくら目を皿のようにして見ようとつとめても、「私」はそれを見ることが出来ない。

人は、それらの虚構に実在性（実在ではなくて）を与えることが出来る。一万円札を印刷してそれに価値があると信じこむことが出来る。人は虚構である国家に愛国心を示し、政府や、機動隊を組織し、物理的力を発揮することが出来る。

人は架空の物語りを創造し、それを小説や演劇として実現することも出来る。舞台上で進行している幾つかの人生は、俳優の肉体を通じて人の目にふれ、人は俳優の声を聞くことが出来、その肉体に触れることさえ不可能ではない。

人はそのとき、俳優ではなくてその俳優の演じている役を見ている。人は彼の目に映り、彼の耳に聞こえるそれを、ハムレットや、シラノや、助六として見ているが、意識のもう一つ内側では、それが仲代達矢だったり、島田正吾だったり、尾上菊五郎だったり、であることも承知している。

俳優は、或る一定の時間と空間の中でだけ演劇の約束

にしたがって、彼ではない別の誰かの人生を生きている。が、それがたとえ暴虐の王の役であろうと、悲痛な革命家の役であろうと、またそれが如何に迫真の演技であろうと、その役を演じているのは俳優自身の肉体と意識であって、他の誰かではない。

仮に俳優が、強烈な暗示によってハムレットになり切ったとしても、実は、それは彼自身の意識が創り出したハムレットの肉体や、性格を真似ているのであって、彼がハムレットになったわけでも、ハムレットが彼にのりうつったのではない。

しかも彼は、一定の時間と空間と演劇の約束を離れたとき、すでにハムレットではなくて彼自身である。彼がそのときなお俳優としての職業意識を持続しているか、父親とか夫とかという立場を意識しているかにかゝわりなく、彼は彼自身である。

俳優における彼の役と彼の「私」との関係は、そのまゝ他の職業における人間の、彼の職業と彼の「私」に移して考えることが出来る。しかも俳優があくまでも彼の役に徹しようとするのと違って、多くの人はその職業の中で、しばしば「私」に立ち返り、また無意識に露呈した「私」に出会ってしまう。

彼の労働によって出来上った作品の、出来不出来を喜

んだり悲しんだりする意識は彼のものであるし、その作品は彼の肉体と意識が働かなければ出来なかったのであるし、その労働が残した苦痛は彼のものである。若し、彼がその労働によって肉体の一部をうしなったとして、うしなったのは彼の肉体である。彼の労働の買手は、心に痛みを感じるかもしれないが、その痛みは忘れる事も出来る。しかし、労働者のうしなわれた肉体の一部は、瞬時のもどって来ない。

労働者が、職業の虚構性というヴェールの下に覆われた「私」と再会したとき、何が起るか。それは各人各様であって一律には言えない。

出来上った家を見て、これは俺の快心の作品だとほくそ笑む大工は、そこに確かに「私」を見ながら、彼の下半身はおどつぷりと虚構性の水面下に沈んでいる、と言えらるだろう。

労働者は搾取されている。この搾取のための生産の構造を根本から改めねばならない、と叫ぶ者は、虚構への挑戦を開始していると言えよう。

しかし、労苦ばかり多くて収入の少ない労働者であるより、他のもっと楽で収入も多い職業に替りたいという者があれば、それは一つの虚構を脱出して、別の虚構に身をゆだねようとしているのだ、と言うべきであろう。

少し意味が違ふけれど、先頃流行した、「脱サラ」という言葉と、その現象には、これと同じ匂いがある。

(三)

毎日毎日、同じ時間に出勤し、判で押したような同じパターンの仕事を繰返し、上役の機嫌を取り、いくら薬掻いても会社の枠からはみ出すことの出来ないサラリーマン生活を脱出して、独立しようというのが、いわゆる脱サラリーマンである。

「寄らば大樹の影」であるより、瘦せても枯れても「一城の主」となり、牛の尻尾であるより、せめて雀の頭ぐらいいにはなりたいたいと言うのだ。

その意気まことに壮、それこそ「人生意気ニ感ズ、功名誰カ復タ論センヤ」と古人の詩でも引いて賞讃したい気になるのだが。

そうやって退職し、独立した人たちが、ではどんな職業を選んだらうか。たしかな統計があるわけではないから、実態はつかみにくいんだけど、テレビや週間誌などの伝えるところでは、どうやら小さなスナックを経営したり、ホットドッグ屋の親父になったり、自家営業の店主になるのが、その独立の正体らしいのである。

らしいのである、としか言えない不たしかな判断であ

るから、こちらに誤解があるかもしれないと断った上で、話をすゝめることにする。

独立とは、別の言葉で言えば主体性の確立ということだろう。そして脱サラとは、企業の客体であることをやめて、みずからの主体性を取りもどす、ということである。

だが「脱サラ」は果して、主体性の確立と言えるだろうか。私にはそれは主体性というより擬似主体性という風にしか思えないのである。

何故なら、それは脱出であっても抵抗ではないからである。もともと、企業の組織に縛られて窮屈な思いはしたくない、というだけの単純な発想しかないのだ。むしろ、それだけでも「私」との出会いと言えなくもないのだが、その単純な発想からは「私」を生かすよりも、再び「私」を虚構の淵に沈める筈しか出て来ない。

「私」が「私」たり得るのは、「私」が「私」の主人になることであって、「私」が他人の主人になることではない。職業はいかなれば、身すぎ世すぎであるから、何をして食べて行こうと、志さえ曲げねばよいということに一応はなるけれど、それにも限界がある。

革命を志す人間が、他を搾取する職業を選ぶことをいさぎよしとするだろうか。一冊の詩集を出そうと志す人

間が、彼の詩人としての主張をまげてまで、彼が俗悪と

信ずる文章を書くことを身すぎ世すぎとすることは有り得ても、それは詩人の心に何の痛みもまねかないだろう

か。
志にも大小高低があるだろう。まったく志と名づけるべきものを持たぬ人生もあるだろう。「井ヲウガチテ飲み、田ヲ耕シテ食フ、帝力、我ニ於テ何カ有ラン哉」であって悪からう筈はない。おでん屋の親父になるのが志という人があったからって、それを一々咎めるのも野暮だろう。

だが、「脱サラ」を宣言して独立した人たちの多くがおでん屋や、喫茶店などを経営して事足りれりとしていたとしたらどうであろうか。

この回の始めに、私は職業を三つに分類した。その第三の項にあたる職業に、第二または第一の項目から流れこんで行くのを、賞讃していただくか。人間の生存に絶対欠かすことの出来ない仕事、または間接にそれに寄与する仕事をやめて、それがあって悪いとは言わぬが、それがなくても人間が生きていられるという事だけをす

るというのはどうだろうか。
人に雇われるのが厭だからと言って、人を雇う職業を始めるのは、自分が拒否した苦痛を他に押しつけること

になる。

労働の売買が虚構にすぎぬことはすでに述べた。その虚構の中で私たちが、売る側の方が買う側より卑しいと考へたらどうなるか。その虚構の中で考へても、買う側の方が人間の本来に大きく反している。

しかし、企業（資本）に縛られ、圧迫されることを嫌って脱出することが、汚れる仕事や、つらい仕事から逃げ出して、楽な仕事、収入の多い仕事に傾くことであればこの世はどうなるか、身すぎ世すぎから、ひたすらなる金儲けへと走り出せばどうなるか。

現代は、そういう風潮が大変強いというのが事実のようだ。世をあげてエコノミックアニマルたんとしているのだから、レジャーに淫して、反労働、または非労働に徹しようとしているかのようだ。

その風潮の最も象徴的な例が、前回でふれた糸山英太郎だと言えよう。人は糸山を非難し、嘲り、攻撃するが（それ自体は正当な行為だが）糸山のような男が生まれて来る土壌が私たちの周囲にあり、ひよっとするとその土壌の生成に私たち自身も一役買っているかも知れぬことに気づかねばならない。

遊び（娯楽、芸術）を私はまるきり否定するわけではない。労働が人間の生存についての必要なら、遊びは人

間の生命の発露だからである。孤島のロビンソン・クル

ソーでもそれを持っていたらうし、リア王の科白にも「乞食だって余分なものを持っていて」とある通りだ。

それを余分なものという言葉で片づけてしまっただけ、いさゝかの語弊があるが、遊びだけがあって労働がないという人生は基本的には考えられぬからだ。

どんなにすぐれた芸術家だって、ロビンソン・クルソーと同じ立場におかれれば、労働しないわけにはいかないだろう。ピカソの絵が途方もない高値で売れ、彼が豊かに暮らすことが出来たのは、この世に耕したり、建てたり、ぬったりする人がいるからだ。

世の中の仕組みの本当の意味からすれば、ピカソは労働者達の働きの余りで生きることと許されていたのだ。とすれば、本当は労働者の生活の方がより豊かであるべきなのであって、ピカソは労働者より貧しい生活に甘んじてしかるべきだったのだ。

むろん、ピカソに限った事ではない。ハンク・アローンだって、マリリン・モンローだって、フランク・シナトラだって、みな同じことなのだ。

そういう考え方でこの世を見れば、労働の買手（資本）は、労働者のおこぼれで生きているということになるし、また、この回の最初の分類でいう第二項の職業の人たち

は、労働者に協力することで生きているという事になる。ところが現実の世の中の仕組みは、本当の意味とは別の意味を与えられていて、労働者は最も貧しい暮らしをしているのだ。こんな間違った話はない。

労働は職業であることをやめねばならない。人間は労働を資本と政治権力から奪い返さねばならない。そうやって始めて人間が人間として生きることが出来る。

ここでようやく私は一つの結論を出す事が出来た。だが、その位の結論なら誰よりも労働者自身がよく知っている。その位の理屈なら、近頃は学生だって判っているという声も聞えて来そうな気がする。

では、改めて私は二つの疑問を提出することにしてしよう。そんなに判っている理屈が、何故現実には、少しも行なわれないのか。

そしてまた、労働者とは何なのか。ということである。第一の疑問の答はこうだ。判っていると云いながら、実は少しも判っていないのだ。或いは判っているのは頭の中だけで、少しも実行しようとしていないからだ。

資本も政治権力も強大で、ちっとやそっとでは倒れそうもないからであり、それから逃げ出すことしか考えず、むしろ資本の枠組みの中で、自分一箇の生活の安楽のみを希う人が多いからだ。

むろん、この答は、これだけでは通り一べんのものであって、答にはなっても解決にはならない。だが、この答をこのまゝ放り出すことによって、疑問を疑問のまま読者に残した方がよいと思う。

第二の疑問の答はこうだ。労働者とは労働を職業とする人間のことだ。或いは労働によってのみ生きている人間のことだ。

だが、この判り切ったことが意外と誤解されているところがあるのを指摘したい。

他の職業とくらべて、技術も才能もいらぬのが労働者、という考えが一般にある。

中学や高校の教師が、生徒の中の成績優秀な子に、進学を奨めるケースはあるが、土方になれと言う事はあるまい。そのことがたゞちに土方という職業への蔑視ということにはなるまいが、土方をするのに優秀な頭脳は格別不要と思っていることの裏返しではある。

数年前、高石友也のフォークに「労働者とは言え、一人死ぬ」というのがあった。路傍で行き倒れて死んでいる労働者を、通行人は誰も見向きもしない、と悲しんだ歌だったが、労働者をわざわざ労働者と呼んだ差別にも「とは言え」という言葉の持つ差別にも気づかず歌っているらしかった。

「代議士するより土方の方がましだ」と言って、政界のみにくさに愛想をつかし、弁護士を開業した元代議士もいた。彼が土方にならなかったことを責めるわけではないが、彼の言葉にも私は不意な職業差別を感じる。土方ばかりが労働者、というつもりは金輪際ないが、例としては最も端的で判り易いからしばらく土方を中心に話を進める。

土方は技術無しでもすぐやれる職業だと、たいがいの人は思いこんでいる。開け放しの門を入るように、入り易い職業だが、土方は技術不要の職業ではない。一人前の熟練労働者になるには、五年やそこらの経験は必要なのである。

大学などで反戦運動などをしていた学生が帝政ロシア時代のナロードニキでも真似たつもりか、卒業すると（或いは中退して）山谷や、釜ヶ崎に飛びこんでくる。それはそれで私は反対しないが、しかし、飛びこんできたその日から、いっばしの労働者になれたつもりでいるなら、労働者は迷惑するばかりだ。

学生運動から横すべりして、労働組合や政党の書記になる人も多く、そんな人が「労働者の階級意識」なんて言葉をふり廻しているのに出会うと、私は不思議な異和感を覚えてしまう、まさか、そんな人の全部が「階級意

識云々」の言葉をふり廻しただけで、労働者になれたと思っているわけでもあるまいが。

労働を職業とする人間、と言っただけでは労働者を定義する言葉として、実はまだ舌足らずなのだ。

昨日今日、土方になったばかりで（工場の門をくぐったばかりで）、まだ労働の味をろくに知らず、未熟練な

うちは労働者ではないのだ。それは明日にも別の職業に転じることが出来るといふことも含めた意味での、労働者の卵でしかない。卵から鶏が生まれるか、家鴨が生まれるか判らない。

他の何者であるよりも、労働者でしかない人間、それが労働者なのである。

読者からの便り

……イオム編集のお仕事、ご苦労さまです。

私はこの一月に、ジョージ・パレット著、鈴木靖之訳のパンフ「アナキスト革命」を新訂刊行しました。私はこのパンフのあとがきで充分に書きたかったのですが、やれませんでした。それは、読売新聞号外と判決主文を「アナキスト革命」に付加したのは、アナキスト革命を理念とした農村青年社運動に対する国家権力とブルジョア社会の評価を明きらかにしたかったからです。宮崎晃さんらの努力で出版された「農村青年社運動史」は貴重な記録ですが、これが入っていません。

この運動は自由コンミュン（地方自治共産体）の自由連合組織によってアナキズムの可能性を一步一步実

現しようとした熱烈な同志の献身だったのに傷つき倒れたので、それは日本のマフノの農民運動だったので。新聞号外や判決主文を収載したのは多数の農青社同志に私情としては、おきのどくにたえません。とくに八木、宮崎さんにはです。

八木、宮崎、星野ら農青社の殉道者は今も革命の熱情に燃えらる私の畏敬してやまぬ正義の同志です。このパンフによってまかれた種子はやがて芽を出し成長し革命の花を咲かせるでしょうから私は失礼をおわびするばかりです。

イオム八号、がんばってください。

——一九七五・二・一六、寒気指凍る群馬の農家に
て—— 大島英三郎